

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

日中の表現スタイルの相違に基づく中国語作文指導の試み

著者	相原 里美
雑誌名	研究論集
巻	114
ページ	73-90
発行年	2021-09
URL	http://doi.org/10.18956/00007993

日中の表現スタイルの相違に基づく中国語作文指導の試み

相原里美

要旨

高等教育機関において、第二外国語または副専攻として中国語を学ぶ学習者に対する中国語作文指導は、カリキュラムや時間的制約により、教員の裁量に委ねられているのが現状である。そこで、筆者は学習者に限られた時間のなかで効率よく中国語作文に取り組みさせるため、機械翻訳を活用した中国語作文指導を試みた。その結果、日本語母語話者の学習者が作成した中国語作文（日本語付き）とそれを添削した中国人チューター中国語を比較することで、日中の表現スタイルに相違があることが明らかとなった。翌年度にはこれらの相違に基づき、日本語をまずリエディット（前編集）してから訳出することに重点を置いた中国語作文指導を実施した。

本稿では、2018年度の作文指導を通して得られた日中の表現スタイルの相違に関する考察結果と、その表現スタイルの相違に基づき実施した2019年度の機械翻訳を活用した中国語作文指導とその成果について提示する。

キーワード：中国語作文、表現スタイル、機械翻訳、リエディット、前編集

1. はじめに

1.1. 本務校における中国語教育の現状

筆者の本務校である関西外国語大学英語国際学部は、英語を主専攻、中国語を副専攻として学ぶ学部で、1年次に英語週8コマ・中国語週4コマの語学集中学習ののち、2年次に英語圏と中国へ1学期ずつ語学留学に派遣される¹⁾。4年間で設定されている中国語関連の科目は、2020年度時点で、1年次の文法中心の「基礎中国語」・「初級中国語」、会話中心の「中国語会話Ⅰ」・「中国語会話Ⅱ」、2年次以降の中級中国語・検定中国語A（リスニング）・検定中国語B（文法）の7科目のみで、英語の「ライティング」のような、「書く力」を鍛えることに特化した科目は設定されていない。そのため、中国語作文の指導は、各科目の担当者に委ねられているのが現状である。

1.2. 中国語作文指導の課題と目的

本務校の1年次の中国語全26クラス（1クラス25～30名）は、統一シラバスで進度が定められ、統一試験が実施されている²⁾。そのため、限られた時間の中で中国語の作文教育を効率よ

く取り入れることが必要とされる。本務校の中国語履修者に限らず、中国語を第二外国語または副専攻として学ぶ入門・初級学習者の「ライティング力」の強化は、時間的な制約によって、実現できていないのが現状である。それでも、自分の意見や主張を中国語で表現する力をつけることは重要なことであり、本務校の学習者のように、2年次以降の留学に向け、自分の考えを伝えられる力を最低限つけさせることが必要となる。また、昨今のコロナ禍の影響で留学できない状況下では、2年次以降の自律的学びを促すためにも重要な教育となる。

1.3. 作文教育の取り組み（2018年度）

筆者は、2018年度秋学期に担当した「初級中国語」（全4クラス）の中で、作文課題³⁾を実施した。この課題は、まず「作文ノート」という課題用の冊子を準備し、1ページに「中国語で言ってみよう日本語の文」と「中国語訳」を3～5文記入させ、1週間に1度課題を提出させた。また、学習者が短時間で効率よく取り組み、かつ課題を諦めてしまわないように、作文課題のためのツールは自由とし、web上で簡単に利用できる機械翻訳の使用も認めた。学習者が実際に活用したツールは、機械翻訳42名、辞書17名、機械翻訳+辞書9名、中国人留学生2名、無回答6名、その他5名であった。そして、授業内で中国人チューター（各クラス週1回2名配置）に添削をしてもらい、教員がチェックしてコメントをつけながら学生に返却するというスタイルで行った。学期末に「作文ノート」を提出してもらい、81名分の作文・誤用データを収集した。

その結果、これまでの日本語母語話者の誤用に関する研究にあるような同義語の選択ミスや文法上のミスの他、学習者が書いた日本語の文と中国人チューターが添削した中国語の文を比較することで、日本語母語話者の表現スタイルと中国語母語話者の表現スタイルに相違が多く見られた。

本稿では、2018年度の作文指導の取り組みを通して得られた日本語と中国語の表現スタイルの相違に関する考察結果と、その表現スタイルの相違に基づき実施した2019年度の機械翻訳を活用した中国語作文指導とその成果について提示する。

2. 先行研究

2.1. 日本語母語話者の中国語作文の誤用に関する先行研究

本務校における中国語履修者のほとんどが、大学から中国語学習を始める。姚（1988：15）や竹中（2007：15）が指摘するように、日本人の中国語学習者の多くは、すでに「言語習慣」が確立しているため、中国語で作文する際は、日本語で考えてからそれを中国語に置き換えており、母語の影響（負の転移）を受けやすい。

さらに、張（2015：92-93）や張・古川（2018：25-26）では、中国語作文における誤用を生

み出す原因に、すでに学習を始めている英語の影響についても挙げられている。実際に、今回の作文課題に対し辞書のみをツールとして作文した学習者の誤用には、以下のように英語の負の転移が見られた。

(1) また来てください。

*请来再。→ 请再来。(Please come again.)

(2) 月曜日は10時に家を出ます。

*我出发家十点星期一。→ 我星期一十点从家出发。

(I leave home at ten on Monday.)

学習者は、副詞“再”や曜日時刻を英語の語順に当てはめて文を組み立てていったために、このような誤用が生じたことが考えられる。

2.2. 日本語表現スタイルに関する先行研究

方・高(2004:152-153)は、日本語の文法構造について、主語は必ずしも不可欠な成分ではないと指摘している。また、中国人は相手に自分の意思をはっきり伝えるのに対し、日本人は「かすかな表情や、控えめな身体の動き、目つきなどを言語行動と置き換えてお互いに意思伝達」し合っているとある。さらに、ある出来事に対して、中国人は行為者に着目するのに対し、日本人は、行為者が誰かということよりも、出来事そのものに着眼点を置いていると言及されている。

土佐(2005)では、中国語は現象を動作で説明するのに対し、日本語は現象を概念化・名詞化する傾向があること、王(2015)では、日文中訳の例を挙げて、日本語では中国語に比べて名詞述語文が多用されていることが指摘されている。

このように誤用や表現スタイルに関する先行研究は多く存在するものの、日中の表現スタイルの相違に基づいた中国語作文教育に関する系統的な研究はこれまで行われてこなかった。そこで、まず次章では、2018年度に実施した作文課題の中から誤用例を挙げながら、日中の表現スタイルの相違について具体的に分析し、第4章では、日中の表現スタイルの相違に基づいた中国語作文指導の実践例を提示していきたい。

3. 誤用例からみた日本語表現スタイルの特徴

以下に提示する誤用例は、中国語学習者が主に機械翻訳⁴⁾を使用し、そのまま、あるいは少し手を加えて提出した作文である。中国語学習者の日本語、中国語学習者の中国語作文→中国

人チューターによる添削文の順に例示する。

3.1. 主語や動作主を省略

以下に挙げる (3) から (7) は、日本語文において主語や動作主を省略されていた例である。

- (3) 今日の気分はどうですか？
今天心情怎么样？ → 你今天心情怎么样？
- (4) もうお腹いっぱいです。
已经吃饱了。 → 我已经吃饱了。
- (5) 何の用ですか？ (怒)
*它是为了什么？ → 你来找我干什么？ / 你想干什么？
- (6) 一緒にバスケットボールや野球をして遊びました。
*我一起打篮球和棒球。 → 我和他们一起打篮球和棒球。
- (7) 家では家事を手伝ったり、一緒に買い物も行きました。
*在家里，我帮忙做家务，还和我一起去买东西。
→ 在家里，我帮忙做家务，还和他们一起去买东西。

(3)、(4) は、主語がなくとも非文とはならないが、主語を示すことでより中国語らしい表現となっている。(5) は、Google 翻訳を使用してそのまま書き写した文であるが、百度翻訳であれば、“有什么事吗？ (何か用がありますか?)” と訳出された。ここで「あなたは私に何の用ですか？」のように「誰が誰に対して」の項目を加えると“你找我有什么事？” (百度翻訳) と訳出された。このように使用する機械翻訳によっては、正しく訳出されるケースもあった。(6)、(7) については、学習者が高校時代にホームステイ先での出来事を一文ずつ訳した例であるが、日本語文に主語がないため、機械翻訳では文脈を判断できずに主語が適当に置き換えられ誤訳となった。

3.2. 述語表現が曖昧で婉曲的

日本語の特徴の一つとしてよく取り上げられるのは、婉曲的な表現であろう。日本語母語話者は聞き手の気分を害したり衝撃を与えたりすることを避け、はっきりと言及するのではなく曖昧な言葉で表現することがよくある。

(8) 授業きついなあ。

*课很懒惰。→ 上课真累。

(9) 宿題が終わらなくてやばい。

*课外作业不结束，危险。→ 作业还没写完，糟糕。

(10) あなたの足の臭いすごいよ。

*你的脚的的气味是惊人的。→ 你的脚好臭啊。

(11) 注文するときだけにしてください。

*请仅在订购时。→ 请仅在点餐时按铃。/点餐请按铃。

请在有需要的时候按铃。/需要服务的时候请按铃。

(8)、(9) の「きつい」や「やばい」は大学生が多用する語であるが、感情の高ぶったときや想定範疇を超えたときに発せられる言葉なので、意味はその時々によって異なる。したがって、中国語に訳す際、「授業がつらい」、「宿題が終わらなくて最悪だ / 大変だ」のように具体的に形容すると訳出しやすい。また (10) は、日本語では直接的な表現を避けて「あなたの足の臭いがすごい」と婉曲に表現しているが、中国語表現でははっきりストレートに「あなたの足はすごく臭い」と表現される。

(11) は、この一文の日本語だけでは状況がわからなかったため学習者に確認したところ、本人はテーブルに配置されている呼鈴を押すと店員が注文をとりにくるシステムのレストランでアルバイトをしていて、中国人観光客が何のボタンかわからずに押ししまい、用事もないのに度々呼び出されて困っており、このフレーズを使いたかったようだ。つまり、お客様に対して直接的に注意することが阻まれたため、間接的に言いたいことを伝えるために、このようなまわりくどい言い回しになっていた。「注文するときだけにする」という言い回しだと、「何をどうするのか」ははっきり伝えない限り自分の意図を相手に汲み取ってもらうことはできない。「注文するときだけベルを鳴らしてください」であれば、「请仅在点餐时按铃。」となるが、この言い方であれば、少々失礼な感じを与えてしまうので、「注文時にベルを鳴らしてください」や「御用の際ベルを鳴らしてください」と言い換えるといいだろう。

3.3. 名詞化する日本語

土佐 (2005) や王 (2015) でも指摘されていたように、日本語文は現象を名詞化する傾向があり、好んで名詞句を多用する傾向が見られた。

(12) 経済学はもはや暗号です。

*经济学已经是一种密码。→ 经济学已经成为了一种密码。

经济学就像一种（难以解开的）密码。

(13) 私の将来の夢は英語教師です。

*我未来的梦想是一位英语老师。→ 我（未来）的梦想是成为一名英语老师。

我的梦想是将来成为一名英语教师 / 老师。

(14) 私の両親は私のピアノを聞くのが好きです。

*我父母都很喜欢听我的钢琴。→ 我父母都很喜欢听我弹钢琴。

(15) 今日の晩ご飯は何ですか？

*今天晚上饭是什么？ → 今天晚上吃什么？ / 今天晚上吃什么？

(16) 道を教えてください。

*请问，您能告诉我一条路。→ 请问，去（目的地）怎么走？

(17) 予定がない日はいつですか？

*没有预定的日是什么时候？ → 你哪天有空？ / 你什么时候有空？

(18) なぜなら彼女たちはとても綺麗な歌声だからです。

*因为她们是特别动听的歌声。→ 因为她们的歌声特别动听。

(12) は、日本語の「A は B です」が必ずしも中国語の“A 是 B”に置き換えられない例である。「経済学はもはや暗号になった / 経済学は（理解しがたい）暗号のようだ」のように「名詞＋です」ではなく、動詞を置き換えて訳すことが求められる。また、(13)「英語教師→英語教師になること」、(14)「私のピアノ→私が弾くピアノ」も同様に動詞を補って訳す必要がある。

(15) から (17) は、「ご飯は何ですか→何を食べますか」、「道を教えてください→どうやって行きますか」、「予定がない日はいつですか→いつ時間がありますか」と名詞句を動詞句に置き換えると中国語らしく訳せるようになる。

また、(18)「とても綺麗な歌声→歌声がとても綺麗」のように、形容詞は連体修飾語として扱うのではなく、形容詞述語文を使って表現される⁵⁾。以上のように、日本語では「名詞 / 名詞句」で表現されたものが、中国語では「動詞」または「形容詞」を使う表現に訂正される例が非常に多かった。

3.4. 一文が長い

大学生に日本語でのレポートや感想文を提出させると、なかなか句読点が出てこないケースがよくあるが、中国語作文においても例外ではなく、一文が長いケースがいくつかあった。

(19) 彼女は就職して私は大学に進んだので、高校の時と比べると会う頻度は少なくなったけれど、一ヶ月に一回は一緒に遊びます。

*自从我找到工作并上大学以来，我没有比在高中时频繁地看到它，但是我在一个月內和她一起玩儿了一次。

→ 她工作了，而我上了大学，所以我们见面的次数比高中时少了很多，但一个月还是能见一次。

(19) のように一文が長すぎると、機械翻訳では主語を混同してしまい、うまく訳出できないことが多い。機械翻訳を使用せずに自力で訳す際も、長くなった文を区切って考えることで訳出しやすくなる。例えば、(19) の日本語文を区切り、機械翻訳（百度翻訳）で訳出すると以下のようになった。

(19') 彼女は就職して、私は大学に進んだ。

だから、高校の時と比べると会う頻度は少なくなった。

でも一ヶ月に一回は一緒に遊ぶ。

她就职了，我上了大学。

因此，和高中时相比，见面的频率变少了。

但是，一个月一起玩一次。（→但是，一个月会一起玩一次。）

最後の一文のみ訂正が入ったが、このように長文を区切って訳すことによって、誤訳を減らすことができる。

3.5. まとめ

「作文ノート」課題の誤用例を通して、日本語の表現スタイルと中国語の表現スタイルについての違いについて考察してきた。この課題に対し学習者のほとんどが機械翻訳を活用してきたことを考慮し、翌年度は主に機械翻訳を活用した中国語作文指導に切り替えることとした。それにより、機械翻訳にかける前に有効とされている、一般財団法人日本特許情報機構特許情報研究所が発行する『特許ライティングマニュアル「産業日本語」』のプリエディット（前編集）の手法を参考に、中国語の表現スタイルに合うように日本語をプリエディットする手法を4項目設定して実施した。

4. 作文指導の取り組み（2019年度）

4.1. 作文ノート（改良版）

2019年度秋学期に担当した1年次の「初級中国語」（全4クラス）の中で実施した作文課題では、2018年度秋学期に実施した「作文ノート」に改良を加えた。課題用の冊子を準備し、1ページに「中国語で言ってみよう日本語文」を記入後、「リエディット後の日本語文」も記入させた。その後、それぞれの日本語を中国語に訳すようにした。1回の課題で5セット記入させ1週間に1度課題を提出させた。また、作文課題のためのツールは自由としながらも、前年度の実施結果を踏まえ、機械翻訳を使用の際は、誤訳の比較的小なかった「百度翻訳」を使用するよう推奨した。前年度同様、中国人チューター（各クラス週1回2名配置）に添削をしてもらい、教員がチェックしてコメントをつけながら学生に返却するというスタイルで行った。学期末に「作文ノート」を提出してもらい、79名分の作文・誤用データを収集した。

4.2. リエディットのルール

機械翻訳にかける前に有効とされているリエディット（前編集）の手法については、一般財団法人日本特許情報機構特許情報研究所（Japio）が発行している『特許ライティングマニュアル「産業日本語」』を参考にした。産業日本語とは、「産業・技術情報を人に理解しやすく、かつコンピュータ（機械）にも処理しやすく表現するための日本語」と定義されている。Japioによる分類は以下のとおりである。

文 レ ベル	①短文にする ～短くシンプルな文にする～	一文を短くして複雑な係り受けをなくすことで、人間の理解が容易になり、機械翻訳時の誤訳を減少できる。ただし、短文化する際は、意図しない内容とならないよう注意する。
節・ 句 レ ベル	②省略しない ～隠れている要素がないか注意する～	主語や目的語などの省略された要素を明示して、文意を明瞭にする。
	③理解しやすい構成にする ～文の構造に注意する～	文の構造を工夫することで、理解しやすく翻訳しやすい文にすることができる。
	④横並びの要素の表現を揃える ～対等に並べ意味に注意する～	要素を対等に並べることで文章に構造をもたせ、係り受けを明確にし、理解しやすくする。
	⑤読点を工夫する ～係り受けや文の構造を明らかにする～	適切な位置に読点をつけることで、係り受けや文の構造を明らかにする。
語 レ ベル	⑥簡潔にする ～シンプルな表現にする～	不要、冗長、難解な表現を避け、元の文の意味が変わらない簡潔な表現を用い、シンプルな文にする。
	⑦言い換える ～誰にでも伝わる表現にする～	多義的な表現やあいまいな表現は、明確・具体的な表現に改める。日本語特有の表現は、訳しやすい表現に改める。

一般財団法人日本特許情報機構特許情報研究所発行
『特許ライティングマニュアル（第2版）「産業日本語」』（2018:4）

この日本語の書き換え作業は、機械翻訳を使用する時だけではなく、自分の力で日本語を中国語に置き換える際にも大いに有効である。そのため、今回はこのプリエディットの手法と2018年度の誤用例と照らし合わせ、中国語表現スタイルに合うようにプリエディットの手法を次の4項目に設定した。

- a. 主語、述語、目的語を明確にする。
- b. 曖昧、遠回しの表現を直接的な表現に変える。
- c. 名詞句を動詞句に置き換える。
- d. 一文を短くする。

4.3. 「作文ノート」作成手順

学習者に対して「作文ノート」を作成する際の手順については、以下のように提示した。

作成手順

- ①場面に合わせて、自分が普段使う日本語で5文考える。
例：アルバイトで／銀行で／路上で／パーティで…
- ②自力・辞書・翻訳機など、自分でツールを決めて中国語に訳す。
- ③日本語をもう一度見直して、書き換える。
 - a) 動作主や受け手をはっきりさせる。
例：何の用ですか？→あなたは私に何の用ですか？
 - b) 若者言葉を標準的な日本語に変えてみる。
例：授業きついなあ。→授業は疲れるなあ。
 - c) 名詞句を動詞句に変えてみる。
例：予定がない日はいつですか？ →いつ時間がありますか？
 - d) 一文が長い時は、途中で切ってみる。
例：私と彼女は大の仲良しだけど、その日は喧嘩してしまった。
→私と彼女はとても仲がいい。しかしその日は喧嘩をした。
- ④もう一度、自力・辞書・翻訳機など、自分でツールを決めて中国語に訳す。
- ⑤仕上がった中国語を確認し手直しする。逆翻訳してみる。

実施期間については、2019年度秋学期のうち各クラスおよそ8週間程度とした。この課題は、授業評価の対象としなかったため、未提出あるいは未完成のまま提出する学生も一部見られた。未完成の事例では、日本語のプリエディット、プリエディット後の翻訳を未記入で提出する学習者が多かった。

4.4. プリエディットの実践例

これから提示する例は、学習者が日本語文をプリエディットした後、それぞれの日本語を機械翻訳で中国語に訳し、そのまま、あるいはポストエディット（機械翻訳訳出後の手直し作業）して提出した作文である。学習者の日本語文（起点テキスト）⇨プリエディット後の日本語文（前編集テキスト）、その下にそれぞれ中国語訳⇨中国人チューターによる添削文の順に例示する。中国人チューターには、中国語訳に文法ミスがあったり、日本語文の意味と異なったりする場合には訂正してもらい、文法的ミスがなくそのまま使用できる場合には「○印」、文法的

ミスはないがやや違和感を覚える場合には「△印」をつけてもらうこととした。

- (20) どこに集合する？ ⇨ 私たちはどこで集まりますか？
*哪儿集吗？ 我们在哪儿集合呢？
→在哪儿集合？ →○
- (21) 放課後時間空いてる？ ⇨ あなたは放課後時間がありますか？
*放学后时间有吗？ 你放学后有时间吗？
→放学后有时间吗？ →○

この2例は、リエディットの段階でそれぞれ日本語の起点テキストにはなかった(20)「私は」、(21)「あなたは」を補足した例である。この他にも、主語や動作主をしっかりと明記する方法は学習者にとって難易度が高くなく、多くの学習者が実践できていた。次に(22)の例を見てみたい。

- (22) お任せで。 ⇨ あなたのお任せでお願いします。
交给我吧。 你来办吧。
→○?? →○(交给你了。)

(22) では、日本語の起点テキストと中国語訳は、一見すると適訳であると判断された。この場合の“交给我吧”をさらに日本語に逆翻訳してみると、「私に任せてください」となる。ここで学習者のリエディット後の前編集テキストを確認すると、「あなたのお任せでお願いします」となっている。このことから、学習者の意図では、「私のお任せ」ではなく、「あなたのお任せ」が正しい訳となることから、ここにリエディットの効果が現れているといえる。次の(23)、(24)では、名詞句を動詞句に置き換えた例となる。

- (23) 切符の買い方わかりますか？ ⇨ あなたは切符をどのように買うかわかりますか？
知道怎么买票吗？ 你知道怎么买票吗？
→你知道怎么买票吗？ →○
- (24) どんな人がタイプ？ ⇨ あなたはどのような男の人が好きですか？
*什么样的人？ 你喜欢什么样的人？
→你喜欢什么样的人？ →○(你喜欢什么样的男孩子？)

(23) では、主語の「あなたは」を補い、「切符の買い方」という名詞句を「切符をどのように買うか」という動詞句にプリエディットしている例である。起点テキストのままでも機械翻訳では動詞句にきちんと置き換えて訳されているのがわかる。(24) は、主語「あなたは」を補い、名詞「タイプ」を形容動詞「好きだ」にプリエディットできた例となる。次の(25)、(26)では、日本語の起点テキストの発話の意図をしっかりと考えプリエディットされている。

(25) 中国でしかできひんことをする。 ⇨ 中国でしか経験できないことをたくさんしたい。
*只在中国制造。 我想做很多只有在中国才能经历的事情。
→ 做只能在中国做的事。 → ○

(26) ここにお弁当箱の落とし物なかった? ⇨ あなたはここで私のお弁当箱を見かけましたか?
*便当盒的遗失物在这儿有没有? 你在这里看到我的便当盒了吗?
→ 这儿有没有遗失的便当盒? → ○

(25) では、起点テキストの「できひんこと」を「経験できないこと」と具体的な動作に置き換えられている。起点テキストで訳出された“只在中国制造”は「中国でのみ製造する」という意味になるので、誤訳となった。また、前編集テキストでは、主語「私」は補われていないが、中国語では「我(私)」が機械翻訳によって訳出されており、適訳となった。(26)では、「お弁当の落とし物」を「お弁当を見かける」というように「名詞句」から「動詞句」へと言い換えることによって成功した例となった。

次の(27)から(30)までの例は、学習者が高校の文化祭での友人との発話を時系列で提示してきた例である。

(27) 劇見にきてな。 ⇨ 私のクラスの劇を見にきてください。
来看戏吧。 请来看我们班的戏剧。
→ △ → ○ (请来看我们班的戏剧表演。)

(28) 何やるん? 何時から? ⇨ あなたたちは何の劇をするのですか?
做什么? 几点开始? 你们演什么剧? 那出戏⁶⁾几点开始?
→ △ → ○

- (29) アラジン！ 10時25分から。 ⇨ 私たちはアラジンをします。
その劇は10時25分からです。
アラ丁！ 十点二十五分开始。 我们做阿拉丁。
那出戏从十点二十五分开始。
→△ →我们演阿拉丁。
那出戏从十点二十五分开始。
- (30) わかった、行くわ！ 頑張れ！ ⇨ わかりました。私はその劇を見に行きます。
頑張ってください。
知道了，我走了。加油！ 好的，我去看那出戏。请加油！
→○?? →○

(27) の起点テキストの「劇」のみの場合、どのような「劇」なのか説明が不十分であるため、「私のクラスの劇」というように具体的にリエディットされている。(28) の起点テキスト「名詞(を)する」という表現スタイルは日本語においてよく用いられている表現だが、「何の劇をする」とリエディットしたことで、中国語の機械翻訳では動詞“做(する、やる)”ではなく、動詞“演(演じる)”が採用されている。しかし、(29) のリエディットで「アラジンをします」(名詞をする)としたために、動詞は“做(する、やる)”と訳出され誤訳となった。(30) の起点テキスト「わかった、行くわ」の中国語訳“知道了，我走了”は、背景を考慮せずこの1文のみで判定した場合、中国人チューターの判定通り問題は全くない。しかし、リエディット後の前編集テキストを見ると、「私はその劇を見に行きます」となっているため、ここではその場を離れる時に使用する“我走了”でなく、“我去看”(見に行く)の方が適訳となる。このように、1文で判断すると一見誤訳ではないが、背景や前後の文脈を照らし合わせると誤訳となることを考慮すると、リエディット(前編集)がいかにも有効であるかが確認された。

4.5. リエディットの課題

これまで学習者のリエディットの実践例を見てきたが、あまりリエディットがうまくいかなかった例も散見された。学習者への聞き取り調査によると、リエディットの仕方がよくわからなかったという声が多くあがった。例えば、主語や目的語をきちんと補足できていないもの、「だ・である調」を「です・ます調」に変えただけのもの、リエディット後の前編集テキストが起点テキストと大きく意味が異なるもの、リエディットが未記入のものなどが見られた。

また、リエディットのルール「c. 名詞句を動詞句に置き換える」の難易度が高いように見

受けられた。「名詞です」、「名詞（を）する」、「名詞（が）ある」、「名詞（を）ください」など、名詞を動詞句に置き換えたり、「です、する、ある、ください」の部分具体的な動詞にプリエディットしたりできず、誤訳となるケースがいくつかみられた。例えば、「名詞（を）ください」の場合、次のような例が挙げられる。

- (31) これください。 ⇨ これが欲しいです。
 请给我这个。 我要这个。
 →△ →○
- (32) チケット二枚ください。 ⇨ (プリエディットなし)
 请给我两张票。
 →我买两张票。
- (33) メニューをください。 ⇨ 私にメニューを持ってきてください。
 请给我菜单。 请把菜单拿给我。
 →△ →○
- (34) 水をください。 ⇨ 私に一杯水を持ってきてください。
 请给我水。 请给我拿一杯水。
 →○ →○（请给我一杯水。）

(31) は、買い物という場面設定だったため、買うものが決まった時の店員に対する発話だと考えられる。起点テキストの訳出文の動詞“給”は「(人に物を)与える、あげる、やる」という意味であり、この場合では前編集テキストの「欲しい、いる」の動詞“要”の方が、適訳であると判断された。(32) では、動詞“給”が「買う」を意味する動詞“买”に置き換えられている。また、起点テキストでは「(あなたが)私にチケットを二枚ください」というように、主語は「あなた」となっているが、中国人チューターの添削では、「私はチケットを二枚買います」というように、主語は「私」に置き換えられている。(33)、(34) は、それぞれ学習者が起点テキストでは「名詞をください」となっていたものを「名詞を持ってきてください」と動詞「持つてくる」を補うことと、「誰に」という受益者も補足することに成功している。ただ、この2例に関しては、起点テキストの訳出文に対する中国人チューターの評価が分かれている。(33) はやや違和感を感じているが、(34) は適訳となっている。また、(34) は“请给我一杯水”のように、動詞“拿”を省略しても誤訳とはならない。その原因の一つとして、「メニュー」

は実際に「もらう」のではなく「見せてもらう」ものであり、「水」は実際に「もらう」ものであるため評価が分かれたと推察されるが、この点に関してはさらに検証が必要である。このように、「c. 名詞句を動詞句に置き換える」手法は学習者にとって難易度が高く、さらに詳細な分類・整理が必要であることがわかった。

5. アンケート調査結果

2019年度の学習者を対象に、作文課題提出後アンケート調査を実施した。「作文ノート」を提出した79名のうち68名がアンケートに回答した。日本語のリエディットの必要性、機械翻訳出後の中国語のリエディットの必要性、そして今後の機械翻訳の活用についての結果は以下の通りとなった。

5.1. 日本語のリエディットの必要性

日本語の起点テキストの手直し、すなわち「日本語のリエディット」の必要性を感じた学習者（Q.2 a・b回答者）は、68名中53名（78%）であった。

Q.1 中国語作文（全般）を作成する際、日本語→日本語の手直しをしましたか？

- A: ほとんど手直した B: 半分くらい手直した C: 時々手直した
D: ほとんど手直ししていない E: 全く手直ししていない

Q.2 日本語の手直しは必要だと思いますか？

- a: とてもそう思う b: そう思う c: どちらともいえない
d: そう思わない e: 全くそう思わない

Q.2 \ Q.1	A	B	C	D	E	合計
a	7人	5人	7人	4人	0人	23人
b	6人	6人	24人	1人	0人	37人
c	1人	2人	2人	2人	0人	7人
d	0人	0人	0人	0人	1人	1人
e	0人	0人	0人	0人	0人	0人
合計	14人	13人	33人	7人	1人	68人

実際に日本語のリエディットを実践した学習者のコメントでは、「実際に訳しやすかったから」、「話すときにどういう文法か理解しやすくなったから」、「日本語は省略している部分があるから」、「手直した方が正確な訳が出てきたから」等の理由でリエディットの必要性を

認識していた。一方、プリエディットの必要性について「どちらともいえない」と回答した学習者の意見では、「そもそも中国語が正しいかどうか分からないから、日本語が変に翻訳されていることに気づかない」、「いつもの日本語を訳しやすい日本語にどう手直ししていいか浮かばないし難しかった」という意見があった。

5.2. 機械翻訳出後の中国語ポストエディットの必要性

機械翻訳を活用後、訳出された中国語の手直し「ポストエディット」の必要性を感じた学習者 (Q.4 a・b 回答者) は、68名中45名 (66%) であった。

Q.3 作文ノートを作成する際、翻訳ソフトを活用した方は、翻訳後自分で手直しをしましたか？

- A: ほとんど手直した B: 半分くらい手直した C: 時々手直した
D: ほとんど手直ししていない E: 全く手直ししていない

Q.4 機械翻訳後、訳出された中国語の手直しは必要だと思いますか？

- a: とてもそう思う b: そう思う c: どちらともいえない
d: そう思わない e: 全くそう思わない

Q.4 \ Q.3	A	B	C	D	E	合計
a	4人	0人	5人	4人	3人	16人
b	3人	4人	8人	9人	5人	29人
c	0人	0人	5人	7人	2人	14人
d	0人	0人	2人	3人	2人	7人
e	1人	0人	0人	0人	1人	2人
合計	8人	4人	20人	23人	13人	68人

「ポストエディット」の必要性を感じる学習者のコメントには、「機械翻訳の訳がチューターや先生の訳と違う時があるから」、「自分でもわかる明らかな間違いがたまにあるから」、「ちゃんと訳されていない時があるから」、「意味が変わってしまう場合があるから」という意見が大半を占めていた。しかし、ポストエディットの必要性を感じてはいるものの、あまり手直しができていない学習者もいた。こういった学習者は「どこを手直ししたら良いかわからなかった」とコメントしている。

一方、あまり必要性を感じていない学習者 (Q.4 c・d・e) 回答者のコメントには、「(中国語が)合っているか合っていないかわからないから」、「機械翻訳はあっていると思ったから (信じたから)」、「短い文だとあまり間違えないから」などの意見が挙がっていた。

5.3. 今後の機械翻訳の活用について

機械翻訳を実際に活用してみた感想について、「機械で翻訳するとアプリによって翻訳結果が違うところがあったから、自然な中国語は何かを自分で調べるのは難しいと思った」、「チューターさんが添削した文と機械翻訳ではまったく違う意味の文になっていたりして機械に頼ってばかりではいけないと思った」、「機械翻訳を活用したが結構間違えていることに気づきました」といった意見が多くあった。しかし、今後も機械翻訳を活用していきたいか（Q.5）の問いに対し、活用していきたいと回答した学習者（Q.5 a・b回答者）は、68名中64名（94%）にのぼった。また、機械翻訳に対する肯定的なコメントには、「中国語の翻訳ソフトは思ったより正確だと思った」という意見もあった。学習者が取り組んだ課題の中には、日本語のリエディットに成功し、チューターに訂正されることなく正確に訳出できた例も多くあったので、今後の機械翻訳の活用について前向きな結果になったことが推察される。

一方、今後も機械翻訳を活用していきたいか（Q.5）の問いに対し、「c: どちらともいえない」と回答した学習者のコメントには、「機械翻訳は信用できない」という意見が挙がっていた。

Q.5 今後中国語作文を作成する際、機械翻訳を活用していきたいですか？

- a: とてもそう思う b: そう思う c: どちらともいえない
d: そう思わない e: 全くそう思わない

a	b	c	d	e	合計
32人	32人	4人	0人	0人	68人

6. おわりに

今回実践した中国語作文指導によって、学習者に自らの日本語を見直し、日本語と中国語の表現スタイルの相違について考えるきっかけを与え、中国語作文における日本語のリエディット（前編集）の重要性を認識させることができた。また、スマートフォンを片手に手軽に活用できる機械翻訳は、作文課題への抵抗感を減らすことに成功し、初級段階での効率的な作文指導の一端を担えることが伺えた。さらに、実際にネイティブスピーカーによる添削文を提示することにより、機械翻訳はある程度進化はしてきたものの完全には信頼できるものではないことを同時に認識させることにも成功した。

しかし、今回はリエディット（前編集）の手法を4項目に絞って実施したため、起点テキストに適応させることができない事例もあり、リエディット（前編集）の手法をさらに分類・整理することが必要となる。それと同時に、学習者が難解に感じるリエディットについては、

明瞭な説明や練習問題等を取り入れなければならない。また、今回の試みでは、プリエディット（前編集）の重要性を強調するあまりその作業に時間をとられ、ポストエディット（機械翻訳訳出後の手直し作業）がしっかりと実践できていない学習者が少なくなかった。提出された課題の中には、訳出された文が自分の意図している文になっているか文法に誤りはないかなど確認する作業を怠らなければ、初級段階の学習者でも防げた誤訳がいくつもあった。ただ、言うまでもなく初級段階の学習者は機械翻訳で訳出された文が適当であるかどうかの判断がつけにくいいため、複数の機械翻訳で訳出して比較する、一部分を切り取ってweb検索をかける等、訳出文の正誤を確認するポストエディットの手法を提示することも必要となる。

今後は、日中の表現スタイルの相違に基づいたプリエディット・ポストエディットの手法をさらに分類・整理した上で中国語作文指導を実践し、それによる学習効果の検証も行っていきたい。

謝辞

本稿は、2019年6月2日天理大学で開催された第17回中国語教育学会全国大会、及び2021年2月4日のIRI共同研究プロジェクト研究会での口頭発表・報告書に加筆・修正したものである。発表の際、貴重なご意見やご助言をくださった先生方、例文の添削にご協力くださった中国人チューターのみなさん、北方工業大学の葛婧先生に、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 2020年度までのカリキュラムの場合。2021年度以降は、英語科目週6コマ、中国語週4コマとなる。教育課程上の留学についても、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により中止や延期となったため、今後は派遣される時期や期間は流動的となる見込みである。
- 2) 2019年度までは統一試験が行われていたが、2020年度については、新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン授業が中心となったため定期試験は実施されず、統一の提出プリントにより成績を評価した。
- 3) 筆者が実施した「作文指導」は、短文を作る“造句”とテーマに沿って長文を書く“作文”を実施したが、本稿においては、“造句”についての考察結果を提示する。
- 4) 機械翻訳の性能は年々向上しているため、実践当時と現在とでは訳出結果が異なる場合がある。
- 5) 郭春貴(2017:286-287)によると日本語の「形容詞+名詞」の述語文は、中国語はほとんどの場合「名詞+形容詞」の述語文にするとより自然な中国語になるとある。
- 6) 学習者は「その劇」を“那出戏”と訳出し、中国人チューターの訂正もなかったが、“戏”は主に京劇のような戯曲を表すことが多いため、“剧”を使った“那部剧”の方が一般的な「演劇」を表せると指摘を受けた。同義語の訳出問題に関しては今後の課題としたい。

参考文献

- 方懋・高鵬飛（2004）「中国人と日本人における言語表現の違い」『新潟産業大学人文学部紀要』(16), 151-161頁
- 郭春貴（2017）『誤用から学ぶ中国語 続編2』, 東京：白帝社
- 高田裕子・毛燕（2009）『日中・中日翻訳トレーニングブック』東京：大修館書店
- 竹中佐英子（2007）〈日本中小学国語写作教学法分析〉『目白大学文学・言語学研究(3)』, 13-24頁
- 竹中佐英子（2008）「中国語に対応する日本語表現—中国語の補語を中心に」『日中言語対照研究論集』(10), 117-130頁
- 土佐朋子（2005）「日本語と中国語における言語構造とその原理—名詞中心構造と動詞中心構造—」『比較文化研究』(69), 109-117頁
- 王燕（2014）「日本語の名詞述語文に関する序論的研究」『北陸大学紀要』38, 139-150頁
- 王燕（2015）「日中対照の立場からみた日本語の名詞述語文」『北陸大学紀要』40, 124-136頁
- 山田優（2019）「機械翻訳VS英語を学ぶ子どもたち—翻訳力が英語力の鍵となる？—」関西大学外国語教育学会 2018年度研究大会 基調講演
- 姚希孟（1988）「日本人学生の中国語作文に見られる日本語の干渉について」『外国語教育：理論と実践』14, 15-25頁
- 一般財団法人日本特許情報機構特許情報研究所（2018）『特許ライティングマニュアル（第2版）「産業日本語」』（2018:4）
- 张恒悦・古川裕（2018）〈基于日语母语者偏误分析的在日汉语语法教学〉『中国語教育』16, 21-31頁
- 张轶欧（2015）〈日本大学生汉语学习语法实例偏误分析 — 以初级学习阶段为中心〉『関西大学外国語教育フォーラム』14, 91-105頁

（あいはら・さとみ 英語国際学部准教授）